

研究の成果と課題

①研究主題

「自己を見つめ、他者を理解できる児童の育成 ～言語活動を通して～」

成果

- ・自己を見つめる時間を多く設けたことで、自分の意見をもつことができるようになった。
- ・友達の考えに興味をもち聞いたり、受け入れたり、共感したりできるようになった。
- ・「かかわり合うこと」が苦手な児童の実態から、常時活動として全校児童で遊ぶ「みんなで遊ぼう」などかかわり合う機会を設けた。学年など関係なく遊ぶ姿や、上学年が下学年を気遣う姿が見られた。
- ・考える根本となる「言語活動」から本研究をスタートできたことで、今後どのように研究テーマに迫っていけるかを考えることができた。

課題

- ・児童自ら「かかわり合う」意識が育つような取り組みや手立てが少なかった。
- ・日常的に行われている活動を見直し、日頃から「かかわり合う」機会を意識して取り組んでいくことができるとよい。
- ・ソーシャルスキルトレーニングなど継続的な取り組みをしていくことで、定着に繋がっていきたい。
- ・多教科で取り組んだことで、毎回の授業の改善点が次の授業に生かしくかった。

②協議会のもち方

成果

- ・小グループで話し合うことで、皆が参加できる協議会の運営ができた。また、ファシリテーターとして、思考をまとめる力、グループを回す力も身についてきた。
- ・短冊からホワイトボードを用いた小グループでの話し合いは、時間短縮にもなりよい。
- ・各ブロックのプレゼンテーションは、内容も多様でよい学びとなった。

課題

- ・プレゼンテーションを協議会で行うことで、協議会の流れが途切れてしまう。協議会で行うのか、学びの会でおこなうのか検討が必要である。
- ・ワークショップだけでなく、各学年の研究経過報告も行うとよい。

③各学年の取り組み

成果

- ・友達のよさに目を向ける、自分の考えを伝える活動を意図的、計画的に行うことができた。
- ・他者を認める機会を増やす声掛けができた。

課題

- ・年度初めのアンケート結果から、日常的な活動や指導と連携できるような取り組みを全校、各学年で年度当初に決めるとよい。また、その取り組みに対しての途中経過を研究全体会等で発表することで、学年に応じた定着や目標を定めることができる。